

## 企画展ライトアップ木島櫻谷 —四季連作大屏風と沁みる「生写し」

泉屋博古館東京(六本木) 24.03.16~05.12



木島櫻谷 《柳桜図》 部分 左隻 1917年

「木島櫻谷」(このしまおうこく 1877~1938)は、円山派の伝統に学んだ写生を重視し動物画で名声を博した画家で、大正6年に大阪天王寺の茶臼山に竣工した住友家本邸を飾るために描かれた縦180cm・幅720cmの大画面に、四季折々のモチーフを描いた四双の大屏風「四季連作屏風」を手がけている。

この作品は、独特な色感の絵具を用いて上質な金地に、夫々季節花の趣向を変えて、顔料を厚く盛り上げて筆跡を立体的に残して油彩画のような筆触に挑戦しているため、“技巧派”“大正の呉春”“最後の四条派”などと称された。

画伯の真骨頂は、それに収まらない極めて近代的なもので、リアルな人間的な感情を溶かし込んだ動物たちを描いた作品では、ときどき見せる豊かな表情が観る人の心に沁み込むようである。本展では、江戸時代中期に京都で生まれた「円山四条派」の代表的な画家たちによる「花鳥画」表現を併せて展示をし、木島櫻谷画伯の「生写し」表現の特筆をライトアップしている。



木島櫻谷 《獅子虎図屏風》



左隻・右隻 1904年